

602 中央大学辞達学会

〔『法学新報』第30巻8(344)号 大正9年8月1日〕

○中央大学辞達学会 去六月十三日正午より我辞達学会は春期大演説会を大講堂に於て開催したるに会する者千余名に上り頗る盛会なりき定刻須賀了君(法三)開会の辞を述へ仙波喜一郎君(経一)は立憲農民党を組織せよ、内山誠一君(法二)は儒教より見たる現代思潮、鬼釜繁君(商一)は米国「ロッキー」以西に現はれたる日本商品、石原義憲君(法一)は死生の境を飛び越せ、越智一美君(予一)は吾等又何をか言はん、橋中一郎君(法一)は社会の現実と崇高なる国民の態度、栗田柳一君

(経一) は生活の芸術化、茂手木八百一君(商一) は教育制度改正論、海野正造君(商二) は都を中心としたる商的芸妓の沿革史、今澤卯之輔君(予二) は全人類の解放、鳥越秀三君(商一) は解放と支配、佐藤又三君(予一) は只汗を流せ、高井博君(予二) は感ずるままに、秋元博君(法三) は生存競争より相互扶助へ、高浪庄作君(予一) は現代社会を顧みて、宮脇信介君(法二) は思索及び言論の自由につきて、足立角平君(法三) は失業問題と当局、松本伴世君(予一) は社会問題の帰趨と吾等、佐藤爲二郎君(経一) は地に潜む力、川崎貞二君(商二) は日支親善に就きて、橋口房子君(法三) は普選に就いて、増子正造君(法二) は日蓮主義より見たる社会思潮と題し孰れも熟弁を振ひ最後に来賓中央大学法学士常田力氏は時弊の一端と題し得意の快弁にて満堂酔へるか如く尚ほ会長花井博士、副会長堀江博士の有益なる訓話ありて午後七時東一雄(経三)氏の閉会の辞を以て散会しそれより弁士並に委員諸氏は別室に於て茶話会を開き歓談に時を移し其中央大学の万歳を三唱して去りたるは九時を過く(委員報)